



TITLE:

<Book Review>Malaysian Sociological Research Institute (A nonprofit organization), INTISARI (The Research Quarterly of Malaysia), Singapore, Vol.I, No.1-Vol.II, No.1

AUTHOR(S):

口羽, 益生

CITATION:

口羽, 益生. <Book Review>Malaysian Sociological Research Institute (A nonprofit organization), INTISARI (The Research Quarterly of Malaysia), Singapore, Vol.I, No.1-Vol.II, No.1. 東南アジア研究 1965, 2(4): 124-124

ISSUE DATE:

1965-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55005>

RIGHT:

るが、スカルノ連峰北側の地質調査はこれがはじめてであり、山脈南側に関するオランダ人の業績とあわせて、ニューギニア背稜山脈の構造の解明に大いに役立つにちがいない。

また本探検隊は海岸の熱帯降雨林、中央高地の森林、森林限界をこえ氷河の上にいるまでのさまざまな環境を経験しているため、植物学・植物生態学の章は専門家にとって熱帯における植物の垂直分布に関して興味ぶかい資料となることであろう。

西イリアン中央高地における、最も興味ぶかい問題である山地パプア族の文化人類学的研究についてのインドネシア側隊員の見解が、本書に見あたらないのは残念なことである。

現在、インドネシアではオランダ人の手になる過去の西イリアン研究の業績をアレンジして、インドネシア語論文で紹介することが盛んであるが、本書はインドネシア人の手による西イリアンの現地調査記録の最初として大きな意義をもつ。

今回の探検ルートが、未探検地域であった地帯を多く含むことよりしても、予報的性格の本書のみでなく、インドネシア側各隊員の専攻分野に関する本報告が、国際的学術雑誌に発表されることが望まれる。

なお、京大側の公式記録は、「西イリアン中央高地」のタイトルで本年中に、生物誌研究会の手により出版される予定である。また、資料整理がすみしだい、昆虫学・地質学・民族学に関する英文報告が京大側隊員により出されるであろう。また、本多勝一・藤木高嶺、「ニューギニア高地人」(1964年)に今回の探検で明らかになった民族学的考察が含まれている。(石毛直道)

Malaysian Sociological Research Institute
(A nonprofit organization): *INTISARI(The Research Quarterly of Malaysia)*, Singapore.
Vol. I, No. 1-Vol. II, No. 1. (発行年月不明)

マレーシアのシンガポール、クアラ・ルンブール、ペナンには、Malaysian Sociological Research Institute (MSRI) と呼ばれる事務所がある。それは、余り目立った存在ではないから、マレーシアに3、4カ月滞在しても、つい見逃し易い。MSRIが1961年に発足してから、まだ余り年月もたっていないせいかもしれない。しかし、MSRIの刊行物は、マレーシアのすみずみで、どのようなことが社会問題となっているかを理解する上に便利であり、マレーシアの知識人や青年の間で可成り注目されている。その主要

な刊行物の一つが、季刊雑誌 INTISARI である。

Intisari とは、サンスクリットに語源を持つマレー語で、「本質」とか、「事物の核心」という意味の言葉らしい。つまり、季刊誌 INTISARI の目的は、マレーシアの現実を直視して、その現実を生ずる諸問題の核心を理解しようとする点にある。編集者はShirle Gordon 女史で、主要な執筆者はマレー人の知識人である。掲載論文も、詳細な脚注をつけた力作が多い。

第1巻第1号は、既に品切れで、残念ながら、筆者はそれを手にすることは出来なかったが、マレーシアの複数社会におけるイスラム教の位置を多角的に検討するという問題を中心とした論文が掲載されたらしい。第2号は、マレー人の土地所有の在り方を中心にした特集号で、「マレー農民の零細化と耕地の細分化」、「マレー人の土地保護法」、「協同組合運動」、「Puasa(断食)の月と経済活動」など、いずれもマレーシアの社会問題の核心をえぐるような論文を載せている。第3号では、イスラム教と adat に関する二つの慣習法の関係、対立、統合を主要テーマとする特集を行なっている。イスラム法と adat に基づく二つの社会的な力の矛盾、対立、混淆の理解は、マレー人社会構造の基底的な諸問題を理解する鍵であることは、周知の事実であろう。第4号も、第3号と同じ問題をモチーフとしていて、土地相続、断食の慣習やその他の事例を中心にイスラム法と adat の関係を論じた論文が多い。第2巻第1号の主題は、教育と言語に対するイスラム教の影響であり、「コーラン塾のマレー人の子供」、「マラヤのイスラム教教育」、「農民とイスラム学校(pondok)」、「マレー語とアラビア語の関係」など、いずれもマレー人社会を理解するのに主要な問題ばかりである。

以上の季刊誌の発行の他に、MSRI は、「マレーシア人」によるマレーシアの研究書を発行し、隔月には、上記に挙げた諸問題を一般の人にも読み易く論じた機関紙を英語、(Seed)、マレー語、(Benih)、中国語(Chungtze)の三つの言語で刊行している。これも興味をひく多くの論文を掲載している。

「マレーシアの中国人」、「マレー人とは」、「ムルト族」、「マレー人の起源」、「農民と zakat」、「南インドとマラヤ」、「マラヤのネグリト族」、「村落レベルのマレー人と中国人」、「マレー人特別法」などマレーシアの現実の理解には、一度は読むに値する論文ばかりである。
(口羽益生)